

「青」の句会 「青」を巡る

本紙「中日俳壇」で選者を務める俳人高田正子さん(65)の主宰する結社「青麗俳句会」が「青地巡礼」と銘打ち、地名に「青」の付く土地などを巡って地域の住民と句会を開く活動を始めた。初回は10月12、13両日に長野県青木村であり、参加者らは古刹・大法寺の境内を歩いて詠んだ句を披露し合った。

〈参道に榎の実落ちて古い寺〉。地元から参加した沓掛正一さん(82)の一句。榎は参道沿いで500年余り前に植えられたとされ、村の天然記念物にも指定されている名木

本紙俳壇選者 高田正子さんの結社

だ。高田さんは「見どころの一つの榎がうまく取り入れられている」とたたえた。実を食用にするために植えた可能性を挙げ、「こずえを見上げて古い時代をしのびたくなる」と評した。

同村は自由律の俳人で、反戦の句で知られる栗林一石路(1894～1961年)の出身地。俳句会の会員はへ一石路の義憤まっすぐ鬼やんま」としのんだ。沓掛さんは「俳句は、ふだん詠む川柳と違い回しが異なり新鮮。会の皆さんが村を盛り込んだ句を作ってくれてうれしい」と喜



吟行で境内を見て回る高田さん(左から4人目)ら＝長野県青木村で

んだ。
名所を訪ねて俳句を詠む活動は「吟行」と呼ばれ、多く

の結社が会員の親睦を兼ねて催すが、地域の人にも参加を呼びかけるのは珍しい。高田さんは「俳句の魅力を発信しながら、外部の人と触れ合って新たな風を取り入れたい」と狙いを話す。

俳句会は、高田さんが師事した俳人・黒田杏子さんが死去して5カ月後の昨年8月に設立。「青麗」という名称には「遠きにおいて思つふるさとは、青く麗しい」との感慨を込めた。

地名に「青」の付く巡礼先は他に、青森市や仙台市青葉区、東京都青梅市など5カ所。初回を青木村にしたのは、規模の大きな自治体と比べ、具体的にどこで何をやるのかが

絞りやすかったからという。高田さんは岐阜市の出身。生まれ育ったふるさとへの思いも強く、岐阜県の自治体も訪ねる予定だ。高田さんは「幸先の良いスタートが切れ、今後への希望が膨らんできた。俳句で新しい縁をつなげたら」と期待を述べた。

(諏訪慧)

